

昭和61年6月25日

精神薄弱児通園施設
新潟市立ひしのみ園
園長 片桐 千秋

木下大サーカスの皆様

御 礼

梅雨に濡れて紫陽花が一段と美しさを増す季節になりましたが、団員の皆様には益々のご活躍、心よりお慶び申し上げます。

先日は、障害を持った為にさまざまな経験の出来ない子等に深いご理解をいただき、大勢をお招き下さいましてありがとうございました。

実際のところ、ジッとしているの、苦手な子や、大声で奇声を出す子の多い施設ですので、どの程度理解し、集中して見てくれるのか不安でした。

体力のある子には、一人の子に二人のおとなが抱いたり手をつないだりして日頃指導しているくらいなのですが、そうした子等にも一般の子どもと同じ喜びを知ることが出来たらどんなに素晴らしいことだろうということで見学をお願いしました。

10分と集中しないあの子達が夢中になって舞台上に釘付になり、沢山拍手していたではありませんか！

とっても素晴らしいことでした。

こだわりが強くいつも横を向いたまゝ物を横目でしか見なかったKちゃんが真正面を向いて笑顔で最初から最後まで見ていました。ちょっとでもお母さんが離れると泣いてしまうNちゃんが筋肉マンの所へよその子どもたちと一緒に行ってくれたのです。一人一人の様子をご報告できないのが残念ですが、あれから施設のバスが毎日、女池I・Cの上を走るたび、おしゃべりの若手なこの子等が、テントの方を「アー、アー」と指さし、あの日の楽しかった思い出をなを楽しんでいることをお知らせします。

あと数日で見られなくなるであろうサーカスのテント。新潟公演の終ることの理解出来ない子どもたちにとってどんなに不思議で淋しい出来事でしょう。

でも、心の中に最適な夢を戴きました。ありがとうございました。

これからも沢山の子どもたちに夢と希望を与えていって下さい。木下大サーカスの益々のご発展と団員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

サーカスから 頑張る心学ぶ

島根県東出雲町

川本 正子 70歳

楽しい夏休み。孫たちが大きなボストンいっぱいに着替えを詰めて来てくれ、今日は最大の楽しみ、木下サーカスを見にゆく日です。私も孫たちと同じ気持ち。子どもころ見たのと、どんなに変わっているのかと、胸をわくわくさせながら松江の北公園の会場へと急ぎました。

次から次へと目を見はる演技。中でも動物たちのかわいらしい演技。彼らはものを言いません。どうして訓練されただろうと動物との温かい長い間のかかわりを想像し感極まった。特に猛獣のトラ、ライオンなど見るからに胸がどきどきするの、むち一つで演技をする。なんて賢いだろうと孫たちとすごい、すごい連発でした。

地上十八メートルの空中ブランコ。見上げれば恐ろしいこと。上手に感覚一つでタイミングを合わせ素晴

らしい演技。みんながたずをのんで見守り、成功したときにはオーというどよめきが響く。時々ひょうきんな役者がふざけてひやつとさせるなど、全身冷や汗が出ました。

明るく日新聞に、みんな終わつた後にさらに訓練、練習しているの記事。頭が下がりました。トラさんもライオンさんもみんな頑張っているんだから人間はなおさら頑張ろうと夜、話し合いました。まず身近なところから、はき物やトイレのスリッパを正しくぬいでおく。ドアの開け閉めは静かにしましょう。言葉遣いは心をこめて優しく丁寧に。夏休み中に、簡単だけど難しいことをやりました。サウナスーツを見て教えられ、考え、実行することを約束しました。夢と感動をありがとうございました。演技をなさる方々はもちろん、裏方さん、スタッフの皆さま、どうか体に気を付けて頑張ってください。夢と希望、勇気を与え続けてください。トラさんなど動物たちにもよろしく。ますますの発展を祈ります。

読者投稿欄より
(平成十二年八月九日)

明 窓

動物も人間も驚いたり、何かに興味を示したとき、かすかに瞳孔(どうこう)が開く。チンパンジーはうれしきときのどの奥で「アッ、アッ」とささやくそう。動物と意思を通じ合うそうと日夜努力をしている調教師は、動物たちのそんなかすかな表情やささきを決して見逃さない。

▼伊豆シャボテン公園チーフトレーナーの堤秀世さんが「ドリトル先生のサーカス」(岩波少年文庫)の解説に書いている。相手の考えていることを理解しようとするより、感じ取ること

が大切。なぜなら動物の方はたいていの場合、私たちの気持ちを引きかんと感じ取っているのだから、と▼五年ぶりの「木下大サーカス松江公演」がきのう開幕した。さっそく第一回公演を見た。主役はやっぱり動物たちである。「人間が訓練により動物の様に、高い所を飛んだり、逆に、動物が二本足で立つて人

間のような動作をする」これは評論家、故大宅壮一さんのサーカスの本質を突いた表現▼明治後期に始まるとされる日本のサーカスの源流は、江戸時代に盛んに興業された軽業や曲馬などの見世物芸だった。物悲しい雰囲気も付きま

とつたが、アメリカでは対照的。かつて団員は子供たちにとつてあこがれの的、トム・ソーヤの最大の夢はピエロになることだった。

▼日本の現代サーカスに、今やあの哀愁を帯びたジントラ「天然の美」のメロデーは似合わない。ミュージカルの要素も取り入れてショーアップされたエンターテイメントである。若い団員も増えた。音と光が織りなす舞台は圧巻だ。「猛獣ショー」の迫力には息をのむ▼それぞれの時代の風俗風潮を反映させながら発展してきた演芸の歴史、それがサーカス。夢の世界は家族だんらんの格好の話題になる。(樹)

(平成十二年七月九日)

五十嵐ちえ子について

五十嵐ちえ子は、重度脳性小児マヒ(両手、上半身)の子どもで現在中学三年生になります。以前は寝せられれば寝たまゝ、車イスにのせられればベルトでぎっしりとしばられ、全身動くことの出来ない子どもでしたが、二年ほど前から足で車イスを動かすことを覚え、言語もどうか他人が聞きとるこゝとが出来るとの明瞭さになり、足で字を書くことも覚え、現在では足で手芸をしたり足でハンカチなどの洗濯も出来るようになって来た意欲のある子どもです。そして今、自分の力で立つことの訓練をしている最中なのです。そこでサーカスを見せていただき、バランスをとることの大切さにふと気づき、立ったり歩いたりするにもバランスをとることに気をつけてやってみれば歩くことができるかもしれない、はやる心で学園に帰りすぐやってみたようです。どうしても出来ないと思っていたことが出来た喜びをつぎの朝、私にははなしてくれました。自分には出来ないと思っていたことが一つずつ出来るようになっていく、それが自信につながり又更に努力を重ねる五十嵐ちえ子にとっては、此の度のサーカス見学は何事にもかえがたい貴重な学習だったと思われまゝ。ほんとうにありがとうございます。

県立ゆきわり整肢学園

担任 坂本

五十嵐ちえ子ちゃんの足で書いた作文

サーカスに行きました
 私は、サーカスに行きました。五十嵐ちえ子
 三つきました。
 サーカスに行きました。バスケのボールを
 ぶつきました。サーカス、楽し
 ました。

サーカスのうさぎも、おたは、サーカス
 ちえ子、うさぎ、ばり、うさぎ、うさぎ
 みて、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 見ました。

おたは、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 と、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ

うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ

うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ
 うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ、うさぎ